# 平成９年度厚生省心身障害研究
# 「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

# 総　括　報　告

主任研究者
東京家政大学教授　樋　口　恵　子

**はじめに**

本報告書は、平成８年度「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」の成果を踏まえ、さらに内容を充実、新たなリサーチ・クエスチョンを得て発展させた研究結果である。

1994年、カイロで開催された国際人口開発会議において、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの概念が提唱され、さらに1995年、北京における世界女性会議で採択された行動綱領においては12の重大領域の一つが「健康」の項の根本理念に据えられ、国際的に定着してきている。リプロダクティブ・ヘルス／ライツとは、「性と生殖に関する健康と権利」と訳されることが多く、子どもをいつ産むか産まないか、産むとすれば何人産むかを女性が自己決定する権利を中心課題とし、妊娠・出産の限定された時期だけでなく女性の生涯にわたる健康の確立を目指している。

1996年（平成８年）わが国政府における「男女共同参画2000年プラン」にも、「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」への取組みとして盛り込まれ、1997年（平成９年）年度末現在「生涯を通じた女性の健康支援政策として、以下のような事業が展開されている。

**生涯を通じた女性の健康支援事業の概要**

**１．事業内容**

(1)　女性の健康支援事業

ア　健康教育事業

女性は、妊娠、出産、月経不順、更年期障害等男性にはない、女性特有の身体的特徴を有していることから、不妊症を含む器質的障害および機能的障害を有することがあるため、女性のしおり等の健康教育教材を用い、生涯を通じた女性の自己の健康を維持・管理するための教育を行う。

①健康教室の開催

②講演会等の開催

イ　女性の健康相談指導事業

婦人科的疾患および更年期障害、出産についての悩み、不妊等、女性の健康に関する一般的事項を中心に、気軽に相談できる相談窓口の設置や相談員の養成をする

ための研修会を実施する

①相談員の設置（一般相談員）

②一般相談員の研修

(2) 不妊専門相談センター事業（不妊専門相談）

不妊に悩む夫婦に対し、各人の健康状況に応じた的確な不妊の治療方法等を相談指導する相談窓口の設置や専門相談員の養成をするための研修会を実施する。

①相談員の設置（専門相談員）

②専門相談員の研修

**2．実施主体および実施カ所数**

都道府県、指定都市、中核市　5カ所（平成9年度末現在）

本報告書の内容もまた、広く生涯にわたる女性の健康支援政策に資することを意識している。1999年（平成11年）2月には「カイロ会議＋5」の国際人口・開発会議が、オランダのハーグで開催され、カイロ行動計画のフォロー・アップが行われる。国内においては、政府は21世紀の基盤をつくる立法の一つとして「男女共同参画社会基本法（仮称）を次期国会に提出すべく準備中であり、その中でプロダクティブ・ヘルス／ライツがどうかかわるか、女性たちの注目を集めている。女性特有の配慮を必要とする医療・保健をめぐる動きは、医療側、利用者側から一層活発になっている。そうした時代において、以下の4班の研究成果が、ひろく医療・保健・福祉・女性政策に、あらゆる関連領域の研究にお役立ていただければ幸いである。

本報告書の構成と内容、分担研究者は以下のとおりである。

**樋口恵子**（東京家政大学）が分担研究者を兼ねる「更年期における女性の健康支援に関する研究」は前年度に文献調査、試験調査、ケーススタディをすでに実施したものを、本年度は、就業構造別に対象を絞って調査した。とくに農業女性の更年期に関する実態調査は他の研究分野を含めて先行的な調査である。リサーチ・クエスチョンは、以下の2項目である。

1．更年期意識調査。

2．更年期についての啓発・普及のあり方。

リサーチクエスチョン2は、今年度新たに加えられたものであり、樋口班においては、これを受けて、全国の保健所と女性センターを対象に、更年期に関する市民向け対策の実態調査を行った。

**原ひろ子**（お茶の水女子大学・ジェンダー研究センター）は前年度に引きつづき以下の二つのリサーチクエスチョンについて研究を進めた

1．女性の健康に関する効果的ネットワークとはどのようなものか

2．望まない妊娠の実態およびこれを防止するための具体策はどのようなものか

原ひろ子班では、女性の生涯のなかでとくに24～45歳の年齢層の女性に焦点をあて、「医

療」とそれ以外の「生活空間」における女性の健康に望ましいあり方を考察・検討している。本年度はリチーチクエスチョンについては、関係諸機関・団体46カ所への訪問聞き取り調査を行ない、一方医療機関における出産・人口妊娠中絶の医療費支払い事例を分析した。

2．に関しては、58項目から成る質問紙を作成、全国の公的女性センターＣＢＯ（Community Based Ongauisation)、助産院など25地点を通じて郵送、有効回答率40％（ｎ＝811）の回答を得た結果を分析している。

**北村邦夫**（日本家族計画協会クリニック）を分担研究者とする北村班は「女性のリプロダクティブ・ヘルスに関する研究」は、世界保健機構（ＷＨＯ）が定義するリプロダクティブ・ヘルス、すなわち「人間の生殖に係るシステム、その機能と進行する過程のすべての側面において、単に疾病や障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあることを指す。したがって、リプロダクティブ・ヘルスとは、人々が安全で満ちたりた性生活を営むことができ、子どもを産むか、産まないか、いつ産むか、何人産むかを決める自由をもつことを意味する」との定義を踏まえ、今年度は以下の２つのリサーチクエスチョンについて研究を進めた。

１）家族計画と女性の健康に関する研究

２）メディア情報が若年層のリプロダクテイブ・ヘルスに及ぼす影響。

とくに１）については、低容量ピルをはじめとした近代的避妊法の導入が遅れているわが国に、期待される将来への取組みなどについてまとめた。またリサーチクエスチョン２）については、特に思春期女子に対するメディアの性情報・ダイエット記事を分析し、思春期女子の健康との関係について考察している。

**井口登美子**（東京女子医科大学女性生涯健康センター）を分担研究者とする「女性の保健医療サービスに関する研究」は、今年度（1997年）から新たに加わった研究班であり、女性の保健医療サービスにかかわる医療関係者を中心とした井口班の参加によって、全体の研究に厚味が加わり医療体制への接点がより密接となった。今回の井口班の研究は、国・公・私立、個人の医療保健施設に対する調査の実施と結果の分析をすすめている。

リサーチクエスチョンは、以上の４班によって随時研究成果を持ち寄り、関連する分野に、他班からの研究から多くの刺激を受け、さらに各班の研究を深めることができた。前年度に述べたように、本研究班は、研究者の領域が自然科学、人文科学、社会科学の多岐にわたっている。各分野の専門家が、女性のリプロダクティブ・ヘルス／ライツという新たな概念を共有し、それを推進するシステムづくりを目指すという。創造的な営みに参加する機会を得たことを、関係者各位に感謝したい。またこの研究結果によって、女性の各ライフ・ステージにおける健康の実態と意識がより明確化し、各方面のお役に少しでも立つことができれば幸せである。

平成10年３月31日

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

平成9年度厚生省心身障害研究
「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」
総括報告
主任研究者
東京家政大学教授　樋口恵子

はじめに

本報告書は、平成8年度「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」の成果を踏まえ、さらに内容を充実、新たなリサーチ・クェスチョンを得て発展させた研究結果である。

1994 年、カイロで開催された国際人口開発会議において、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの概念が提唱され、さらに 1995 年、北京における世界女性会議で採択された行動綱領においては 12 の重大領域の一つが「健康」の項の根本理念に据えられ、国際的に定着してきている。リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは、「性と生殖に関する健康と権利」と訳されることが多く、子どもをいつ産むか産まないか、産むとすれば何人産むかを女性が自己決定する権利を中心課題とし、妊娠・出産の限定された時期だけでなく女性の生涯にわたる健康の確立を目指している。

1996 年(平成 8 年)わが国政府における「男女共同参画 2000 年プラン」にも、「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」への取組みとして盛り込まれ、1997 年(平成 9 年)年度末現在「生涯を通じた女性の健康支援政策として、以下のような事業が展開されている。

生涯を通じた女性の健康支援事業の概要

1.事業内容

(1)女性の健康支援事業

ア健康教育事業

女性は、妊娠、出産、月経不順、更年期障害等男性にはない、女性特有の身体的特徴を有していることから、不妊症を含む器質的障害および機能的障害を有することがあるため、女性のしおり等の健康教育教材を用い、生涯を通じた女性の自己の健康を維持・管理するための教育を行う。

①健康教室の開催

②講演会等の開催

イ女性の健康相談指導事業

婦人科的疾患および更年期障害、出産についての悩み、不妊等、女性の健康に関する一般的事項を中心に、気軽に相談できる相談窓口の設置や相談員の養成をするための研修会を実施する

①相談員の設置(一般相談員)

②一般相談員の研修
(2)不妊専門相談センター事業(不妊専門相談)
　不妊に悩む夫婦に対し、各人の健康状況に応じた的確な不妊の治療方法等を相談指導する相談窓口の設置や専門相談員の養成をするための研修会を実施する。
①相談員の設置(専門相談員)
②専門相談員の研修
2.実施主体および実施カ所数
　都道府県、指定都市、中核市 5 カ所(平成 9 年度末現在)
　本報告書の内容もまた、広く生涯にわたる女性の健康支援政策に資することを意識している。1999 年(平成 11 年)2 月には「カイロ会議+5」の国際人口・開発会議が、オランダのハーグで開催され、カイロ行動計画のフォロー・アップが行われる。国内においては、政府は 21 世紀の基盤をつくる立法の一つとして「男女共同参画社会基本法(仮称)を次期国会に提出すべく準備中であり、その中でプロダクティブ・ヘルス/ライツがどうかかわるか、女性たちの注目を集めている。女性特有の配慮を必要とする医療・保健をめぐる動きは、医療側、利用者側から一層活発になっている。そうした時代において、以下の 4 班の研究成果が、ひろく医療・保健・福祉・女性政策に、あらゆる関連領域の研究にお役立ていただければ幸いである。
　本報告書の構成と内容、分担研究者は以下のとおりである。
　樋口恵子(東京家政大学)が分担研究者を兼ねる「更年期における女性の健康支援に関する研究」は前年度に文献調査、試験調査、ケーススタディをすでに実施したものを、本年度は、就業構造別に対象を絞って調査した。とくに農業女性の更年期に関する実態調査は他の研究分野を含めて先行的な調査である。リサーチ・クェスチョンは、以下の 2 項目である。
1.更年期意識調査。
2.更年期についての啓発・普及のあり方。
　リサーチクェスチョン 2 は、今年度新たに加えられたものであり、樋口班においては、これを受けて、全国の保健所と女性センターを対象に、更年期に関する市民向け対策の実態調査を行った。
　原ひろ子(お茶の水女子大学・ジェンダー研究センター)は前年度に引きつづき以下の二つのリサーチクェスチョンについて研究を進めた
1.女性の健康に関する効果的ネットワークとはどのようなものか
2.望まない妊娠の実態およびこれを防止するための具体策はどのようなものか
　原ひろ子班では、女性の生涯のなかでとくに 24～45 歳の年齢層の女性に焦点をあて、「医療」とそれ以外の「生活空間」における女性の健康に望ましいあり方を考察・検討している。本年度はリチーチクエスチョンについては、関係諸機関・団体 46 カ所への訪問聞き取り調査を行ない、一方医療機関における出産・人口妊娠中絶の医療費支払い事例を

分析した。
2.に関しては、58項目から成る質問紙を作成全国の公的女性センターCBO(Community Based Ongauisation)、助産院など 25 地点を通じて郵送、有効回答率 40%(n=811)の回答を得た結果を分析している。

北村邦夫(日本家族計画協会クリニック)を分担研究者とする北村班は「女性のリプロダクティブ・ヘルスに関する研究」は、世界保健機構(WHO)が定義するリプロダクティブ・ヘルス、すなわち「人間の生殖に係るシステム、その機能と進行する過程のすべての側面において、単に疾病や障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあることを指す。したがって、リプロダクティブ・ヘルスとは、人々が安全で満ちたりた性生活を営むことができ、子どもを産むか、産まないか、いつ産むか、何人産むかを決める自由をもつことを意味する」との定義を踏まえ、今年度は以下の 2 つのリサーチクェスチョンについて研究を進めた。
1)家族計画と女性の健康に関する研究
2)メディア情報が若年層のリプロダクテイブ・ヘルスに及ぼす影響。

とくに 1)については、低容量ピルをはじめとした近代的避妊法の導入が遅れているわが国に、期待される将来への取組みなどについてまとめた。またリサーチクェスチョン 2)については、特に思春期女子に対するメディアの性情報・ダイエット記事を分析し、思春期女子の健康との関係について考察している。

井口登美子(東京女子医科大学女性生涯健康センター)を分担研究者とする「女性の保健医療サービスに関する研究」は、今年度(1997 年)から新たに加わった研究班であり、女性の保健医療サービスにかかわる医療関係者を中心とした井口班の参加によって、全体の研究に厚味が加わり医療体制への接点がより密接となった。今回の井口班の研究は、国・公・私立、個人の医療保健施設に対する調査の実施と結果の分析をすすめている。

リサーチクェスチョンは、以上の 4 班によって随時研究成果を持ち寄り、関連する分野に、他班からの研究から多くの刺激を受け、さらに各班の研究を深めることができた。前年度に述べたように、本研究班は、研究者の領域が自然科学、人文科学、社会科学の多岐にわたっている。各分野の専門家が、女性のリプロダクティブ・ヘルス/ライツという新たな概念を共有し、それを推進するシステムづくりを目指すという。創造的な営みに参加する機会を得たことを、関係者各位に感謝したい。またこの研究結果によって、女性の各ライフ・ステージにおける健康の実態と意識がより明確化し、各方面のお役に少しでも立つことができれば幸せである。
平成 10 年 3 月 31 日